

定信紀行

第十話

白河焼のこと

寄稿 市文化財保護審議会委員

佐川 庄司

老中退任後の松平定信は、白河藩政においてさまざまな施策を展開しており、殖産興業の振興にも意を注いでいる。それは、白河焼などの陶器制作、西陣織に学んだ織座の設置、酒造における杜氏の招聘、須賀川ガラスの制作、玉川村での鉄の精製などである。写真は、城下桜町にあった藩窯で焼かれた白河焼「琥珀薬水指」である。箱蓋に次の墨書がある。

表「内窯琥珀薬水指」
裏「蓋黒塗爪北越濱名石
白河幕下土桜里住
陶師小林覚左衛門作
享和元辛酉年秋九月出来」

この箱書によれば、登り窯などの本窯ではなく小規模の内窯で焼成した琥珀の釉薬をかけた水指で、小林覚左衛門が作陶したものである。その上蓋は黒漆塗りで、掴みには新潟の海岸で採集された名石が使用され、享和元年（1801）9月に完成したという。楽焼による茶道具の水指で、器面全体に貫入が入り、口形は楕円形を呈している。



▶白河焼「琥珀薬水指」
高さ13・5cm 口径20・3cm
(藤田記念博物館所蔵)

白河焼の陶器として現存する数少ない貴重なものである。定信は寛政年間（1789～1800）に城下桜町に所在した瓦方役所の瓦師小林覚左衛門に陶器制作を命じ、同氏を瀬戸・信楽・京都清水・楽焼などの窯元へ派遣し、陶器修業を行わせ白河焼の創始者とした。小林家文書の文化年間（1804～18）の記録によれば、定信は参勤交代に合せて江戸城本丸（将軍家斉）と西の丸（家斉の子家慶）に、白河焼の茶碗を内献上していたという。

◎観光課 ☎(28)5526

白河かるた 札でつながる今・昔



丹羽長重
十枚目「丹羽長重」
に
まちづくり

丹羽長重（1571～1637）は、織田信長・豊臣秀吉に仕えた丹羽長秀の子として美濃国（現在の岐阜県）で生まれました。父長秀の没後、越前・若狭両国と加賀・近江・123万石を継ぎましたが、秀吉による勢力削減策により石高を4万3千石まで減らされました。そして1600年、徳川方である前田利長との間で、北陸における関ヶ原の戦いとされる「浅井・榊原の戦い」を引き起こし、家康により改易させられました。しかしその後、長重は1603年に常陸国古渡に1万石を与えられ、大名として復活します。理由は諸説ありますが、2代将軍徳川秀忠の妻と長重の妻が従姉妹であったこと、丹羽家の持つ築城技術が秀でいたことなどがあげられます。さらに1627年には、幕府より会津領から独立したばかりの白河への移封を命じられ、長重は初代白河藩主となります。長重は小峰城を大規模改修したほか、城下町の改修・整備を行い、約400年経過した現在まで残る町割を形成しました。波乱を越え、白河の地に灯されたまちづくりの火は、4世紀を経た今も人々の生活を照らしています。

◎まちづくり推進課
☎(28)5533